

岡本博司先生の人と学問

大学院政策研究科博士課程修了生を代表して

白木智昭

岡本博司先生は、平成20年12月15日逝去された。直前まで大学院の演習でご指導頂いていただけに、あまりに急な旅立ちであった。

先生は昭和37年3月早稲田大学大学院経済学研究科を修了され、衆議院大蔵委員会調査室を経て、昭和41年4月千葉商科大学商経学部専任講師に任用されて以来、千葉商科大学一筋に40余年の長きにわたり大学の発展にご尽力された。

先生の深い学識について、もとより私には語る資格はないが、大学院でのご指導を通じて私が存じあげる先生の学問への姿勢、お人柄を紹介させて頂くことでお許し頂きたいと思う。

岡本先生と私との出会いは、千葉商科大学大学院博士課程の入学試験の面接であった。私の発言の矛盾を一つ一つの確に、しかも淡々と指摘される先生のお姿が大変印象的であった。以来、ご逝去直前までご指導頂くこととなった。

先生は、ご専門の財政学についてお名前の通り「博識」でおられた。

古今の古典、名著に通じ、院生の質問にはいつも文献を紹介されながらお答えになっていた。先生は口癖のように「古典を読まないといけませんよ」と話されていたが、それは基礎となる知識の重要性を誰よりもご存じだったからに他ならない。

先生のそうした真摯な姿勢を端的に示しているのは、公共選択論への造詣であろう。かつて主流の財政学者から異端視されていたバージニア学派の主張にいち早く着目され、わが国におけるこの分野の草創期に研鑽を重ねておられた。

ほんの一例で恐縮だが、公共選択論の中心的存在であるブキャナン（1986年ノーベル経済学賞受賞）の名著『財政学入門』（深沢実監訳、文真堂、1973年。Buchanan (1970), *The Public Finances: an Introductory Textbook*. 3rd ed.)

の邦訳作業への貢献をご紹介したい。岡本先生は本書の第19, 20, 21章と後半の重要な章の翻訳をご担当されている。同書は公共選択論の文献としては早期の邦訳でありながら、今もって多くの学徒が手にする必読の文献となっている。

一方、教育者としての先生は、温情あふれる方であった。

大学院博士課程の演習では、いつも院生の報告を穏やかな表情でお聞きになっておられた。どのような報告やレポートであっても決して否定されることなく、僅かでも良い点をみつけてはご評価くださり、院生の自信とやる気を引き出してくださった。しかし、不明確なポイントや論理の一貫していない点は容赦なく指摘され、目指すべき方向を見失わないよう、絶えず大所からご指導してくださった。

加えて、先生は留学生に対しても大変親身に面倒をみておられた。日本語に苦勞している留学生を相手に、懇切丁寧に指導されているお姿をしばしば目にした。先生はいつも「私は添削しているだけだよ」と謙遜されていたが、多くの留学生に慕われたご様子からは、言葉の壁を越えて先生の熱意が伝わっていることを感じた。

そうしたお人柄から、先生の主宰する大学院博士課程の演習には、宇田川璋仁 横浜国立大学名誉教授（現 千葉商科大学大学院プロジェクトアドバイザー）、日向寺純雄 青山学院大学名誉教授（現 関東学園大学学長）といった、わが国を代表する財政学者の方々が、実に気兼ねなく参集されていた。まさに至高の研究環境でありながら、サロニックな雰囲気は損なわずに演習が開催されていたのは、先生のお気遣い、ご配慮によるところが大きかったと拝察される。

そんな先生だが、唯一 IT は苦手とされ、「私はメールとかネットは駄目だから、連絡は手紙で頼むよ」と仰っていた。図らずも先生への最後のご連絡もハガキであった。次回の演習の予定をご案内したところ、独特の特徴ある文字で「次回は出席の予定です」とのご返事を頂戴した。体調も良好なご様子で、次回の演習ではお元気なお姿を拝見できるものと安堵した矢先の訃報であった。

多くの院生に慕われ、誰よりも真摯な研究者であり、熱意ある教育者であった岡本博司先生の業績を永く讃えるとともに、賜った学恩に衷心より感謝申し上げ、ご冥福をお祈りしたい。